路の組合せの関係で、ほかに本務として乗務している者がある行路に、便宜同乗する場合を便乗という。便乗時間の計算は乗務時間と同様である。

3 仕業時間 機関車乗務員の投炭訓練や洗缶(せんかん)作業の時間等をいう。

4 準備時間 乗務前の準備および乗務後の整理に要する時間の両方を、同じ準備時間の名で呼んでいる。この準備時間の計算方は車掌・機関士・自動車運転士等、それぞれの職務に応じて異なっている。

5 待合時間 ある区間の乗務を終り、そこからふたたび出発地へ向って乗務する場合に、帰りの乗務する列車等を待っている時間または本線のある区間を便乗して、支線を乗務する場合に、分岐駅で支線の列車の発車を待つ時間等をいう。この間にも多少の仕事のあるのが通常であり、待合時間のうち1時間までは、勤務時間に算入されている。

6 徒歩時間 乗務員が詰所と乗務開始箇所、または乗務終了箇所の歩行に要する時間をいい、徒歩時間が10分をこえる場合は、こえる分を勤務時間に算入する。

[機関車乗務員および電車運転士の勤務および給与規程] (俗に内達1号という) では、特別な用語を多く用いているが、おもなものをつぎにあげる。

1 作業時間 内達1号の適用を受ける者の勤務時間のことであり、実乗務時間、便乗時間、準備時間、徒歩時間、待合せ時間、動力車の看視時間および訓練時間に分けられている。

2 実乗務時間 出発地の発車時刻から到着地の到着時刻までの、実際に乗務している時間をいい、機関士が実際にハンドルを握っている時間という意味から、俗にハンドル時間ともいわれる。

3 動力車の看視時間 機関車駐泊所等において、駐泊する機関車等を看視している時間。

4 訓練時間 乗務員の職務遂行に必要な訓練にあてる時間であって、1箇月間に8時間以内の訓練がみとめられている。

5 換算作業時間 内達1号の適用を受ける者の作業時間は、実乗務時間をもっとも高く評価して $\frac{1}{2}$ に、便乗時間は $\frac{1}{3}$ に、その他の作業時間は $\frac{1}{2}$ に、そのほかそれぞれ作業の内容によって換算され、1日平均の換算作業時間は蒸気機関車等の乗務員は5時間30分、電気機関車等の乗務員は5時間45分とされている。以上により8時間勤務しても、換算率の低い作業である場合には、1日平均の換算作業時間に満たないこともあり、また実乗務時間が多ければ、1日分以上の換算時間となることもある。このようにして毎日の換算時間を記録し、その月の換算作業時間が基準の時間をこえると、その分だけ超過勤務手当が支払われる。

以上のほか勤務時間に関係して用いられる用語は数多く、そのおもなるものはつぎのとおりである。

1 勤務定時間 勤務を要する時間として定められた時間をいう。

2 正規の勤務時間 事実上あらかじめ割りふられた、始業から終業までの時間をいう。

3 深夜の時間帯 22時から翌朝5時までの間をいう。

4 休憩時間 権利として労働から解放されることを保障されている時間で労働基準法実施後は、同法により、自由に利用させることおよび一せいに与えることになった。しかし、国鉄のある部門については特例が認められ、一せいに与えなくともよいことになっており、また乗務員等には休憩を与えなくともよいとされているが、休憩時間に賃金を支払わない。

5 休息時間 作業の連続からくる疲労を回復させ、能率の向上を図る目的で休息させる時間のことであって、昭和24年人事院規則によって定められたこの休息時間の制度が、当時政府職員であった国鉄職員にも適用されたのが始まりとなっている。なお休息時間は勤務時間の中に含まれ、賃金支払の対象となる。

6 休養時間 勤務時間の割りふりがなく、勤務から放たれている時間のことであって、とくに乗務員の乗務と乗務との間を指す場合に用いられている。

7 夜間睡眠時間 1昼夜交代または特殊交代によって勤務する場合には、夜間に4時間の睡眠時間を与えることになっている。

8 作業間合 勤務の途中において作業が断続する場合に、中断されてい間の時間の意であって、規程上定義された用語でなく、俗称として用いられる。また作業を継続する態勢にありながら、短時間作業が断続するときの時間を手持時間などとも呼んでいる。(白井一美)

きんむしゅべつ 勤務種別 職員が実際に勤務につく場合の方法をいくつかに分けたものである。1週の平均勤務時間が48時間と定められている場合、これを毎日8時間ずつ6日間で勤務するとか、あるいは2日分の勤務時間をつづけて勤務するとか、また日によって勤務時間に長短があり、かつ5日間で48時間の勤務を終る場合等は、公休日のほかに非番日を設けて勤務時間の総数をこえないようにするとか、それぞれ形式または内容の点において異なるところがある。日本国有鉄道勤務および休暇規程には勤務種別としてはつぎのものがある。

1 日勤 一般の官庁や会社、工場等で行われている形態と同じようなもので、昼間において8時間(休憩時間を除く)を勤務する。

2 夜勤 形態は日勤と同様であるが、勤務時間が深夜にまたがる。

3 3交代 昼夜にわたる業務を3人交代で勤務するもので、24時間を8時ずつ勤務するものと、深夜に交代する不便をさけるため、24時間を昼番と夜番とに分けて2交代勤務をし、夜番に当るときは夕方から勤務し、翌朝昼番の者と交代して非番(俗に明番ともいう)に入るものがある。通常前者を正則3交代、後者を変則3交代とも呼んでいる。

4 特殊交代 これには甲と乙との2つがあり、いずれも拘束24時間の勤務であるが、甲は労働基準法の定めにより深夜業の禁止されている女子に適用することを目的としているもので、深夜の時間帯(22時から5時まで)を解放し、ほかに1時間の休憩時間が与えられる。乙は深夜業の可能な者(女子では電話掛・看護婦および寮に勤務する満18才以上の者。男子は18才以上の者全部)に適用することを目的とするもので、4時間の休憩時間と4時間の睡眠時間とが与えられる。1勤務の拘束が24時間にわたり、通常その日の朝から翌朝にかけて勤務する点では、国鉄に早くからあった1昼夜交代と似ているが、1日平均勤務時間は1昼夜交代は9時間であるのに特殊交代は8時間となっている。また1昼夜交代は労働基準法上適用箇所制限をうけるが、特殊交代は深夜業が許されるかぎり、適用上の制限をうけることはない。

5 1昼夜交代 1昼夜にわたる勤務で、この間に2時間の休憩時間と夜間において継続4時間の睡眠時間とが与えられる。特殊交代乙といちじるしく似ているが、休憩時間と睡眠時間とを除いた1日平均勤務時間が9時間となっており、8時間労働制に対する例外規定によるもので、適用については労働基準法によって制限を受ける(労働基準法第40条および同法施行規則